

インタビュー

災害時の「学び」を守る

大規模災害にいかに備え対応するか



能登半島地震で被災した学校に建てられた仮設校舎

徳島県発！

「学び直しの拠点」を目指す
県立夜間中学

ポイント解説

科学の力で災害を乗り越える
防災科研

災害時の「学び」を守る 大規模災害にいかに対応するか

おおつば あやこ
大坪 彩子

初等中等教育局初等中等教育
企画課 教育公務員係長

きたはら さとし
北原 諭

初等中等教育局初等中等教育
企画課 教育公務員係専門職

にしむら ふみひこ
西村 文彦

大臣官房文教施設企画・防災部
参事官(施設防災担当)

まつだ あつし
松田 淳

大臣官房文教施設企画・防災部
参事官(施設防災担当)付 参事官補佐

ながとも たかひろ
永友 貴博

大臣官房文教施設企画・防災部
参事官(施設防災担当)付 企画係長

地震や津波、豪雨・台風や洪水。いつでもどこにでも起こり得る大規模災害に際し、どのように行動し、誰が何をすれば、また、組織を超えてどのように連携すれば、被災した児童生徒たちの学習を継続させることができるのでしょうか。これまで通りの日常、学校活動を取り戻すために、何が必要なのでしょうか。

災害時に文部科学省は、学校施設の復旧に向けた技術職員の派遣や、被災した児童生徒の学習指導や心のケアのため教職員やスクールカウンセラー等の被災地支援人材に係る派遣調整等を行います。2024年1月1日に発生した能登半島地震で対応を行った文教施設企画・防災部と初等中等教育局の担当者に話を聞きました。

元日の災害発生

—— 能登半島地震の発生から1年が経ちました。災害発生時の状況と、文部科学省がどのように初動対応に当たったのか教えてください。

西村：2024年1月1日16時10分、石川県能登地方を震源とするマグニチュード7.6の能登半島地震が発生しました。最大震度7の石川県をはじめ、甚大な被害が及んだ新潟、富山、福井の4県では、地震発生直後から警察や消防、海上保安庁、自衛隊などによる人命救助を最優先とした大規模な救援活動が始まりました。

同時に、文部科学省でも被災した児童生徒の学習継続支援を目的に、地震発生翌日の1月2日には職員が被災地入

りし、6月末までに延べ600人以上が被災した学校の復旧・復興に力を尽くしました。

まず、私たち防災担当が行わなければならないことは、被災した学校施設が当面使用できる状態かどうか、二次災害防止の観点で安全性を確認する応急危険度判定を迅速に実施することでした。1月11日から22日にかけて延べ54人の調査団を文部科学省が派遣し、石川県内の公立学校58校の応急危険度判定を行いました。

永友：学校の被災状況を迅速に把握するため、私たちは応急危険度判定団として、被災地のなかでも被害が甚大な奥能登4市町（輪島市、珠洲市、穴水町、能登町）に行きました。文教施設応急危険度判定士の資格をもつ技術

職員がチームを組み、能登半島の中ほどの中能登町にある石川県立鹿島少年自然の家を拠点とし、数日ごとに班を分けて対応しました。私たちの班は、拠点から離れた輪島市や能登町に向け車で向かいましたが、当時はまだ、道路も土砂崩れ等で通行が困難な場所も多々ありました。倒壊は免れたものの大きく損傷した校舎もあった一方で、印象的だったのは、周辺の木造家屋が倒壊するなか、そこに鉄筋コンクリートの校舎が建っていて、地域住民の避難所となり、避難者を受け入れて、給水車やトイレカーなど様々な支援の拠点として機能している様子でした。当時の状況では、1日3校、4日で10校程度を判定することが限界でしたが、複数の班を組織して入れ替わりで現地に



石川県立金沢北陵高校での土砂崩れ



天井内壁の落下



応急危険度判定の状況

派遣し、建物の構造体の被害だけでなく、ライフライン、避難所の状況なども聞き取りながら調査を進めました。

西村：被災地4県では住宅家屋の全壊6,437棟、半壊や床上・床下浸水などを含めると計139,668棟に上り、学校施設は国公立合合わせて約1,000校が被害を受けていますが、幸いにして校舎の倒壊はなく、多くの学校で起こっていたのは校舎の外壁や天井の落下、割れた窓ガラスの散乱、地面の亀裂などでした。

阪神・淡路大震災の被害なども踏まえ、文部科学省では、柱や梁など、建物を支える構造体の耐震化を進めており、公立学校施設では、昨年度末までに99.8%完了していました。そのような地道な取り組みも、校舎の倒壊を回避できた背景にありました。

「学び」の継続に向けた、初めての大規模集団避難

—— 学校が避難所として使用される中、児童生徒の学習継続にあたってはどのような対応を行いましたか。

大坪：私たち初等中等教育企画課で、全国の教職員の派遣要請を行いました。今回の地震では、高校受験を目前にした3年生を含め、中学生の皆さんの学習の場の確保のために集団避難が実施されました。先生方は被災地と避難先で二分されて人手が足りず、またご自身も被災者でいらっしゃるの、大変な状況であったと思います。避難先では、日中の学習指導・生活指導に加えて、夜間の見回り等の対応も含め多く

の教職員が必要となりましたので、文部科学省から全国の都道府県・指定都市の教育委員会に応援派遣の依頼を打診しました。

北原：派遣に応じてくださった先生方の生活と安全を保障することも必要でした。希望される方々の宿泊先などを用意できるよう調整しましたが、民宿や大学施設など近隣の皆様からも多大な御協力をいただきました。結果として、55都道府県市と1独立行政法人から290人の教職員が交代で石川県に駆けつけてくれました。そのうちの10人は、教員免許があり実際に教壇に立

ったことがある文部科学省の職員です。

なかでも、隣接する福井県は同じ被災地でありながら積極的に関わってくれました。また、とくに印象的だったのは、東日本大震災で被害を受けた福島県や、西日本豪雨で被害を受けた広島県が多くの教職員を派遣してくださったことです。助け合いの温かい気持ちが全国に広がる枠組みの必要性を痛感しました。

大坪：各地の教育委員会からベテランの指導主事の方や現場の先生方、教育委員会職員の方々が多く参加してくれたことにも感謝しています。昼夜を



仮設校舎外観



仮設校舎内での学びの再開

ともにする集団避難にあつて、生徒の学習指導の面だけでなく、生活指導の面でも経験が豊富なため、被災地の教職員のみならず全国から応援に入ってくれた教職員にとっても頼りになる心強い存在でした。

被災地の教育環境の再開に不可欠な学校支援チームによる支援

—— 被災地における学習指導や教職員も含めた心のケアに当たり、各地の学校支援チームがどのように対応されたか伺います。

西村：学校で避難所が開設された場合、本来的には自治体の防災部局がその運営を担うものですが、災害発生直後は学校の教職員の協力が必要になる場合があります。しかし、避難所運営や学校再開に向けたノウハウのある教



大臣官房文教施設企画・防災部 西村 文彦 参事官

職員が必ずしも多くいるわけではありません。

松田：能登半島地震において、応援に駆けつけてくれた学校支援チームは、救援物資の保管や配布、飲料水や食事の確保から仮設トイレの設置方法、避難所生活のルールづくりや役割分担など、災害時の避難所設営・運営に必要な体系的な訓練を受けている方々です。教職員だけでなくスクールカウンセラー資格を持つ養護教員など多様な人材で構成されているため、学校避難所での暫定的な学習指導や心理面のケアにも対応可能です。

地震発生から4日後の1月5日には兵庫県の学校支援チームが到着、続いて三重県、岡山県、熊本県、宮城県、合わせて5県の学校支援チームが1月13日までに被災地入りしました。京都府は学校支援チームではありませんでしたが、個別に教職員やスクールカウンセラーを派遣してくれました。

能登を支えた経験が これからの災害に備える力に

—— 9月20日には能登地方で豪雨災害もありました。現在の支援状況などはいかがでしょうか。

松田：文教施設企画・防災部の私と、

初等中等教育局の職員の2名で、豪雨の後すぐに現地に入り、被害状況を調査したほか、技術面や財政面、特に心のケアの面での支援の必要性を聞き取って現在対応しています。現地の教育長からは「何とか子供たちに避難元の校舎で卒業式を迎えさせてあげたい」というお話も伺いました。

地震発生以来、何度も奥能登を回ってきました。能登で会う子供たちの笑顔がやりがいでもあります。しかし、子供たちは気丈に振舞っている部分があるとも感じますので、日常に戻るまでしっかり寄り添って支援していこうと強く思います。



大臣官房文教施設企画・防災部 松田 淳 参事官補佐

—— 今回の震災を機に、文部科学省として取り組んでいることを教えてください。

西村：能登半島地震の対応では、被



災地の教職員や教育委員会、また全国の教職員等の方々の尽力に心から敬意を表したいと思います。悲惨な現場をみるたびに私が感じたことは、何より平時からの準備が大切なこと、特に学校という存在を守ることは、児童生徒のみならず、地域で暮らす人々を支える礎になっていることです。

一方で、今回の震災対応では被災地

の状況やニーズの把握に時間を要するなど、課題も明らかとなったところです。特に、自治体が派遣する学校支援チームの迅速・機動的な取組等と連携して文部科学省による支援等を行うなど、より機動的で、効果的に被災地の学校を支援できる広域的な枠組みを構築することの重要性を感じました。

そこで、文部科学省では、今後の大

規模災害への備えとして、地方公共団体間の支援として行われた学校支援チームの取組との連携・協力や、教職員・スクールカウンセラーの追加派遣の調整など、被災地の子供たちの学びの継続や学校の再開に資する人材派遣の新しい枠組みとして、「被災地学び支援派遣等枠組み」（略称D-EST：Disaster Education Support Team）の構築に向けた検討を進めています。

9月の大雨での対応はその実践の一例でもあります。これからも様々な知見を加えることで、さらに実践的な取組へと成長させ、全国の被災地を支える力になっていくことを目指しています。

[被災地学び支援派遣等枠組み\(D-EST\)について](#)



文部科学省職員も教師として派遣 中学生の集団避難

文部科学省は、中学校教員免許状を有し学校現場での指導経験がある職員10名を、石川県の集団避難施設へ派遣しました。現地で学習指導にあたった小久保行政改革推進室長(当時)が報告します。



小久保 智史
行政改革推進室長(当時)

私は、被災地の中学生が集団避難を行った施設で、全国からの先生とともに子供たちの学びの支援を行いました。入試直前の3年生に、社会科の指導、各教科の個別学習の支援、テストの採点等の学習指導とともに、清掃活動や食事、休み時間の見守りなど生活指導面の支援に携わりました。

避難校の先生方は、自らも被災者である中、複数の避難先及び能登に残る生徒も含めたケアに当たるため、分散・制約された体制での対応に当たるとともに、終わりが見えない避難生活の不安とも闘っていました。

こうした中、可能な限り避難校の先生の負担増にならないように支援を行うべく、派遣メンバーで常に議論、意見集約して先生方に提案するとともに、自ら動けるところを見つけて対応しました。

同じ施設内で、学校/放課後(夜も含めて)の時間的・空間的な区別がしにくい、被災により制服や学習用品も当然に揃うわけではない、一人で過ごすことのできる場がないなど、異なる環境下において、子供や先生方のストレスも増大していました。生活面のリズム(ルール)づくり、子供たちの心や身体のケア等の課題に対して、随時変わる子供の状況を見極め、試行錯誤しながら取り組みました。「地震がなかったら…」と生徒が自分の進路先についてふとこぼした言葉、休み時間に体育館で遊ぶ生徒の生き生きとした表情など、一つ一つが印象に残っています。

派遣期間中は、避難元からの距離の問題や地方公共団体が多岐にわたる課題に直面する中、学校への効果的な支援が難しい状況も感じられました。

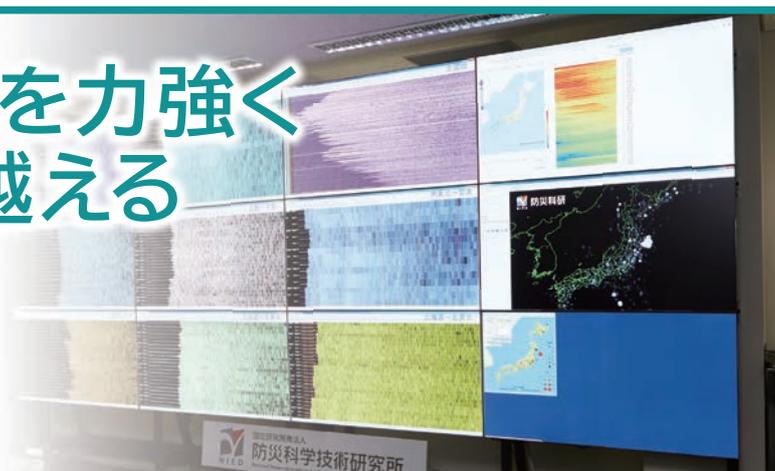
各都道府県において、被災時の広域的な支援体制構築のためにも、日頃から、教員配置や研修、各種事業等を通じた人的交流に加え、市町村同士や校長会等も含めた様々なレベルでの連携をより一層深める必要性を感じました。

また、文部科学省としても、過去の震災時の対応や今般の教員派遣の取組も踏まえ、地方公共団体の枠を超えた子供の学びの支援を充実していく必要性を感じました。





科学の力で災害を力強く しなやかに乗り越える 防災科研



防災科研データセンターの地震波形モニター画像

- ▶ 防災科研の観測データは緊急地震速報などに活用される。
- ▶ 実物大の建物の耐震性能評価実験や、自然の断層活動の再現実験などを行える世界最大級の実験施設・装置を保有。
- ▶ 災害現場の情報一元化システムの開発で、日本の災害対応にも貢献。

2024年は、能登半島における地震や豪雨などによる深刻な災害が相次ぎました。自然災害が多発する日本では防災・減災の備えが重要ですが、そのためには「今何が起きているのか」を知るための観測と、「なぜ・どのように起きているか」を明らかにするための研究開発が必要です。そのような観測や研究を行っているのが**防災科学技術研究所**です。

●災害国・日本の防災科学技術の研究拠点

日本は様々な自然災害が多発する世界有数の災害国です。文部科学省が所管する国立研究開発法人防災科学技術研究所（以下、防災科研）は、災害国・日本の防災科学技術研究の中核的機関として、災害の発生予測や早期復旧・復興を実現するため、地震・津波・火山噴火・豪雨・豪雪などによる、あらゆる自然災害を対象に研究を進めています。防災科研の多岐にわたる取組のうち、主に地震に関する取組について紹介します。

●緊急地震速報にも活用される観測データ

皆さんのテレビやスマートフォンに届く緊急地震速報には、防災科研の観測データも活用されています。

1995年の阪神・淡路大震災を契機として、政府の特別の機関として、地震調査研究推進本部が設置されました。防災科研は、地震調査研究推進本部が策定した基盤的調査観測計画に基づき、**全国の陸域で限なく地震活動を観測するための基盤となる観測網を整備してきました**。地震動の振幅・周期の範囲は広いので、観測目的に応

じて地震計を使い分ける必要があります。例えば、微弱な揺れを観測するための「高感度地震計」や、強い揺れを記録するための「強震計」があります。このうち、高感度地震計の観測データをもとに即時に震源を推定する方法を防災科研と気象庁が共同で開発し、2007年から緊急地震速報に活用されることとなりました。

●南海トラフ地震に備える新しい観測網

日本列島を取り巻くプレート境界は大部分が海域にあり、地震活動が活発です。そのため、防災科研は海域においても地震・津波をリアルタイムに観測するためのケーブル式観測網を整備しています。北海道沖から房総半島沖には日本海溝海底地震津波観測網（S-net）、熊野灘と紀伊水道沖には地震・津波観測監視システム（DONET）が整備されています。海域の地震津波観測網による観測データの一部は、JR各社との協定のもと地震発生時の新幹線の緊急停止などにも活用されています。これら**全国の陸域から海域までを網羅する「陸海統合地震津波火山観測網」**を愛称「MOWLAS」として、防災科研が統合運用を行っています。

ここに新しい観測網が加わります（図1）。南海トラフ周辺

の海域では今後30年以内にM8～9クラスの地震が70%～80%の確率で発生すると想定されており、ひとたび発生すれば地震・津波により甚大な人的・経済的被害を引き起こす恐れがあります。このような背景から、防災科研は高知県沖～日向灘に「南海

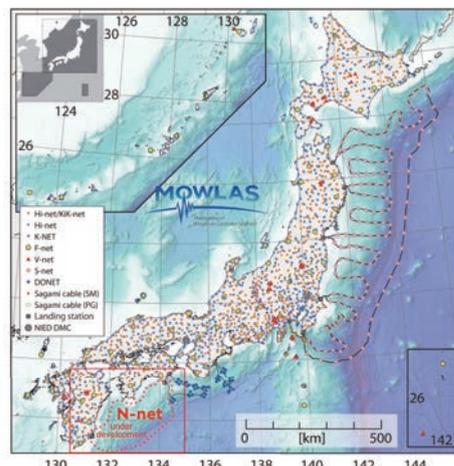


図1 MOWLASの観測点配置(右)とN-netの整備状況(左)

トラフ海底地震津波観測網(N-net)の整備を進めており、2024年から沖合システムの運用を開始しました(沿岸システムは現在整備中)。

この新しい観測網により、**地震動を最大20秒程度、津波は最大20分程度早く直接検知できるようになります。**すでに一部の観測地点のデータが気象庁の津波情報等に活用されており、沿岸への津波到達時刻や高さといった情報発表の迅速化、精度向上などが期待されています。

●世界最大級の実験施設・装置

自然現象のメカニズムを解明するためには、実際に起きた現象の観測だけでなく、実験による研究開発も重要です。防災科研は、地震研究のために世界最大級の実験施設・装置を保有しています。

「**実大三次元震動破壊実験施設**」(E-ディフェンス)は、実大規模の構造物を前後・左右・上下に揺らすことができます。巨大な震動台の上に10階建てオフィスビル相当の構造物を載せ、阪神・淡路大震災を上回る地震動を起こす実験(図2)などを行ってきました。

防災科研はE-ディフェンスを使用した実験で、**構造物が損傷・倒壊に至る過程を解明**してきました。損傷度合いを瞬時に把握して安全性を判断する技術の研究開発や、耐震性能・対策技術の評価にも取り組んでいます。2024年10月からは、愛知県豊橋市と協力し、実際の小学校における技術実証も実施しています。



図2 E-ディフェンスでの10階建てオフィスビル実験

●地震発生メカニズムを解析する

防災科研の誇る実験装置は他に、断層のずれを自然に近いサイズで再現する「**巨大岩石摩擦試験機**」があります(図3)。試験機のサイズは幅13.4メートル、奥行き4メートル、高さ5.9メートル、重さ約200トンにもなり、世界最大規模です。長さ7.5メートルの巨大な岩石をすり合わせることで**断層のずれを再現し、地震のメカニズムを調べることが**できる装置です。

巨大岩石を用いた実験研究には、2011年から10年以上にわたり取り組んできました。これまでに3機の岩石摩擦試験機を開発しており、2023年に現行の試験機を用いた研究開発を開始しました。これらの試験機を用いた実験研究の成果はNatureなどの国際誌に掲載されたほか、地震学の発展への高い貢献が認められ、2024年度日本地震学会技術開発賞を授賞しています。

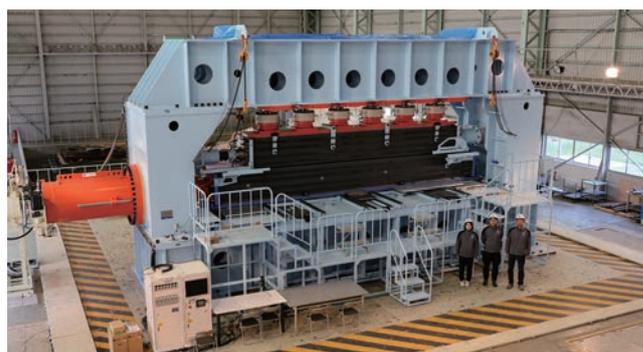


図3 巨大岩石摩擦試験機の外観

●災害情報のパイプライン

防災科研の役割は、地震の調査観測やメカニズム解明に向けた研究開発だけではありません。災害対応の現場で役立つ、情報発信・共有システムの研究開発及び開発したシステムを活用した支援活動も行っています。

災害時には様々な組織が同時並行的に活動を行います。かつては災害対応にあたる組織の情報システムの連携が難しく、各組織は全体の状況や互いの動きが見えな

いまま対応を行うしかありませんでした。

このような状況を打破するため、災害時に必要な情報を組織間で共有するシステムを防災科研が開発しました。「SIP4D（基盤的防災情報流通ネットワーク）」と呼ばれるシステムです。**災害時に複数の組織から異なる形式で発信される情報を一元化し、情報を必要とする組織がすぐにアクセスできるように作られています。**

このシステムは内閣府との協働チームであるISUT（災害情報集約支援チーム）での対応に活用され、昨年の能登半島地震においても、発災直後から所内外と協働し情報共有支援を行いました。防災科研が開発したシステムが日本の災害対応を支えています。

●おわりに

あらゆる自然災害を乗り越えるためには、「予測・予防」「応急対応」「復旧・復興」のすべての過程に対応した、災害に強い社会を実現しなければなりません。防災科研は「一人ひとりが基礎的な防災力を持ち、高いレジリエンス（回復力）を備えた社会」を築くことを目的に掲げています。日本と世界における中核的機関として、防災科学技術のイノベーションをさらに押し進め、レジリエントな社会の実現に向けて取り組んでいきます。



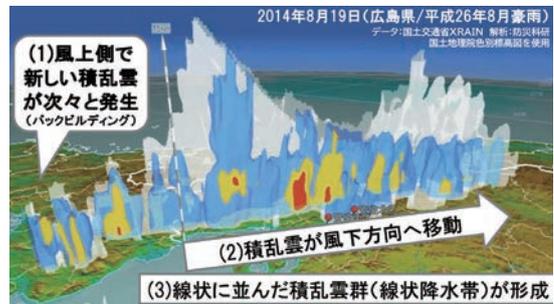
生きる、を支える科学技術
NIED 防災科研

防災科研の身近な研究成果

線状降水帯の自動検出技術の開発

近年は、線状降水帯による大雨で、毎年のように甚大な水害・土砂災害が発生しています。このような背景を受け、防災科研では気象庁気象研究所など他機関とも共同で、線状降水帯をリアルタイムで把握する技術開発を行っています。この技術により、災害発生の危険度が急激に高まっている地域における線状降水帯を自動的に検出し、警戒レベル4相当(自治体が避難指示を発令する目安)以上の状況でより災害が発生しやすい状況となっていることを周知できるようになりました。

2000年以降、防災科研では、雨粒の形を観測できるレーダーを開発・導入し、高精度な降雨強度推定の研究を行ってきました。こうした研究の蓄積も、リアルタイムでの線状降水帯の自動検出技術開発に寄与しています。

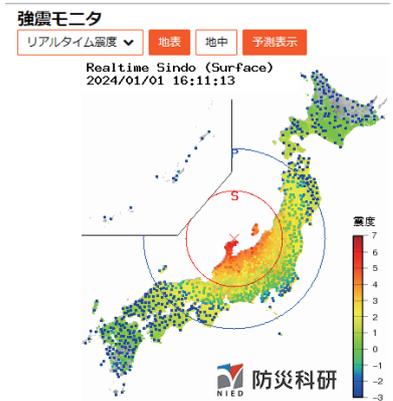


線状降水帯の雨の強さの三次元構造

揺れのリアルタイム可視化技術（強震モニタ）の開発

防災科研の強震観測網で観測された日本全国の揺れを、リアルタイムに表示するWebサービスが「強震モニタ」です。地震発生時には、揺れが伝わっていく様子を色の変化で確認できます。

強震モニタのデータは、Yahoo!天気・災害のリアルタイム震度や、スマホアプリ「TBS NEWS DIG」、「特務機関NERV防災」にも提供されています。

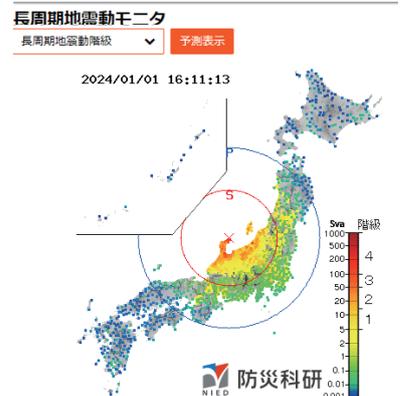


長周期地震動の予測手法の開発

大規模な地震では、周期(1往復するのにかかる時間)が長い大きな揺れが生じます。このような揺れを「長周期地震動」といいます。遠くまで伝わりやすく、高層ビルを長時間にわたって大きく揺らす特徴があります。

防災科研では、この長周期地震動を即時に予測する手法を開発しました。この技術を用いて、2023年から緊急地震速報では、大きな揺れが予測される地域に加え、長周期地震動が予測される地域も発表されるようになりました。

また、防災科研においても「長周期地震動モニタ」により予測情報の提供を行っており、長周期地震動による被害軽減に大きく貢献しています。



令和6年能登半島地震時の強震モニタと長周期地震動モニタ及び緊急地震速報に基づく予測情報

最大予測階級 4 石川県能登など



「学び直しの拠点」を目指す 県立夜間中学

お話を聞いた人

徳島県立しらさぎ中学校

徳島県教育委員会



安藝 憲志 校長先生



教務主任 横山 るみ 先生



仁宇 拓夢 先生



卒業生 峰 祐紀 さん



義務教育課 義務教育指導担当
班長 二宮 正太 さん

夜間中学とは、戦後の混乱や不登校など様々な事情により義務教育を十分に受けられなかった方へ、いつでも・いつからでも学び直しの機会を提供する学校です。近年はニーズも多様化し、現在、32都道府県・指定都市に53校が設置されています。

2021年、全国初となる「県立」の夜間中学が徳島県に開校し、昨年3月、同校で中学校の学びを終えた卒業生たちが新たな一歩を踏み出しました。徳島県立しらさぎ中学校の先生と卒業生、教育委員会の方々に、地域社会における夜間中学の役割や今後の展望についてお話を聞きました。

徳島県立しらさぎ中学校

2021年4月に開校した徳島県立しらさぎ中学校は生徒数34名からスタートし、2024年11月時点では39名が在籍しています。

2024年度は16歳から76歳までの幅広い年齢層に加え、9カ国から21名の外国籍の生徒が在籍しています。

さまざまな理由から、義務教育段階において十分な学びを経験できなかった方の「学び直し」（同校は原則3年、最長9年の在籍が可能）を主な目的としており、阿波踊りや藍染め、歩き遍路など、「徳島ならではの」文化を体験できる点も特色です。また、増加す

る外国籍の生徒（2024年度は半数超）に対応するために日本語指導の授業も多く設定されています。

「様々な国の方が集まり、一緒に学べるグローバルな環境は、日本国籍の生徒にとってもメリットが非常に大きいと思います」と安藝憲志校長先生は語ります。「本校では、勉強したいという外国籍の方にも対応できるように、受け入れ態勢を整えています。嬉しいことに、外国籍の卒業生からも日本語指導も受けられる夜間中学に対する感謝の声をいただいています」

さらに、しらさぎ中学校では進学に向けた面接や体験入学などの進路指導にも力を入れています。隣接する定時



遍路体験学習



藍染め体験

制高校である徳島県立徳島中央高校との交流会が、同校へ進学するきっかけとなっています。また、過去には徳島県立総合看護学校への入学実績もあります。

なぜ「県立」夜間中学になったのか

開校に先立ち、徳島県では2015年度から文部科学省事業を活用した調査研究を開始しました。県・市町村の教育委員会と中学校長会で構成される「中学校夜間学級協議会」を設置し、全国の事例を参考にしながら、夜間中学のあり方や運営について調査・研究を実施しました。

徳島県教育委員会の二宮正太さんは当時の様子を次のように語ります。

「徳島県の全域で夜間中学に対するニーズ調査を行った結果、生徒数や教員数を確保するためには市町村を跨いで広域に生徒を受け入れる『県立夜間中学』の設置が望ましいという結論に至りました。

開校にあたっては教育委員会内に推進チームを設置し、条例や規則の改正、使用施設の改修や教育課程の検討など、多岐にわたる業務を行いました。

また、夜間中学について知ってもらえるように県・各市町村の施設やハローワークなどに入学案内を設置したり、教育委員会の広報やSNSなどを活用したりし、周知活動を行ってきました。2019年には県民や教職員等を対象にしたシンポジウムも開催しました」

不安を感じながら入学した夜間中学

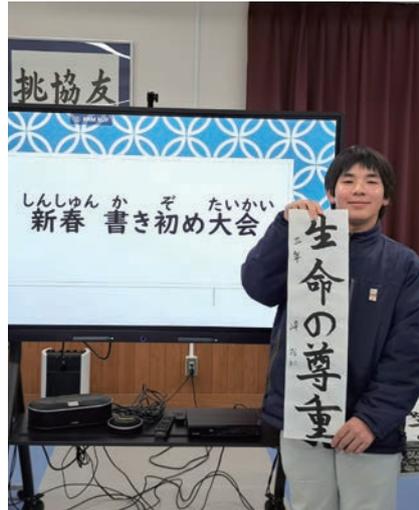
2024年3月にしらさぎ中学校を卒業した峰祐紀さんは、いじめがきっかけで小学6年から中学2年まで不登校でした。

就職はしたものの、仕事を続ける中で読めない漢字や複雑な計算に対応できなかったこともあり、学び直しの必要性を痛感したといいます。

「僕の里親さんが夜間中学について紹介してくれたのがきっかけでした。

最初は「夜の学校って楽しそう！」と思った一方で、勉強についていけないか不安にも感じ、ハードルは高かったです」と峰さんは夜間中学との出会いについて語ります。

「でも、入学前の面接の際に、先生方は夜間中学がどのようなところかを具体的に教えてくださいました。通い始めてからも先生方は『教室は間違える場所』だと言ってくださったので、心が軽くなりました」



在学中に生徒会長を務めた峰さん

「誰一人取り残さない」授業

不安を感じながらも周囲に後押しされて峰さんが入学したしらさぎ中学校は「誰一人取り残さない」を指導方針に掲げています。

夜間中学の一眼目は17時55分からスタートします。40分の授業を4コマ行

って20時55分に授業が終了し、21時30分までには全員が下校します。

授業は5つのコースに分かれ、「チャレンジコース」は学びの習熟度に合わせて3つに、外国籍の方を対象にした「ベーシックコース」は日本語の学習レベルに応じて2つに分かれています。合計16名の先生方（非常勤を含む）が付き、きめ細やかな授業が展開されています。

「どのコースに入るかは毎年度、生徒の希望に基づいて1週間体験してもらって決めます。新学期から新しいコースに移ったり、外国籍の方がチャレ



授業風景

しらさぎ中学校（ちゅうがっこう）の教育課程（きょういくかてい）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
チャレンジ1	こころと国語 (4)		しなやかな社会 (2)		すばらしい数学 (4)			理科 (2)		あそび音・美 (1)	からだの健康 (1)	まなぶ技術 (1)		めざす外国語 (英語) (2)		めざす総合的な学習の時間 (1)		めざす道徳 (1)		めざす生活 (1)		
チャレンジ2	こころと国語 (4)		しなやかな社会 (2)		すばらしい数学 (4)			理科 (2)		あそび音・美 (1)	からだの健康 (1)	まなぶ技術 (1)		めざす外国語 (英語) (2)		めざす総合的な学習の時間 (1)		めざす道徳 (1)		めざす生活 (1)		
チャレンジ3	こころと国語 (3)		しなやかな社会 (2.5)		すばらしい数学 (4)			理科 (2.5)		あそび音・美 (1)	からだの健康 (1)	まなぶ技術 (1)		めざす外国語 (英語) (2)		めざす総合的な学習の時間 (1)		めざす道徳 (1)		めざす生活 (1)		
ベーシックコース1	日本語指導 (10)										すばらしい数学 (3)		あそび音・美 (1)	からだの健康 (1)	まなぶ技術 (1)		めざす外国語 (英語) (2)		めざす総合的な学習の時間 (1)		めざす道徳 (1)	めざす生活 (1)
ベーシックコース2	日本語指導 (8)				しなやかな社会 (1)		すばらしい数学 (3)		理科 (1)	あそび音・美 (1)	からだの健康 (1)	まなぶ技術 (1)		めざす外国語 (英語) (2)		めざす総合的な学習の時間 (1)		めざす道徳 (1)		めざす生活 (1)		

学年(がくねん)に関係(かんけい)なくコース制(せい)で授業(じゅぎょう)を行(おこな)っています

(出典)しらさぎ中学校 公式サイト 2025年度説明会資料

ンジコースに入ったりすることも可能です」と、生徒のニーズに応える仕組みを説明してくれたのは、教務主任の横山み先生です。

「教科書はありますが、生徒に合った授業をするために補助教材を作成しています。また、週に一度はミーティングを開き、生徒の状況について気が付いたことを教員間で共有するようにしています」

学ぶ楽しさを大事にした授業を実施

しらさぎ中学校の開校時から英語を担当する仁宇拓夢先生は「昼間の中学校で教えていた時に比べると、生徒たち一人ひとりのバックグラウンドが大きく異なるため、そのニーズに応えるための授業の準備や研究にける時間は多くなりました」と語ります。

「生徒が学ぶ楽しさを感じられるような授業を心がけています。英語を話したら通じたという成功体験を積み重ねてもらえるように工夫しています」

横山先生によると、しらさぎ中学校には英語を母語とする生徒もたくさんいることから、英語を使ってコミュニケーションする機会にも恵まれているとのこと。

卒業生の峰さんはしらさぎ中学校での毎日を笑顔で振り返ります。

「英語の授業では単に教科書を読む

のではなく、みんなで英語の歌やスピーチを学びました。また、テストは希望者のみで宿題もなかったため、夜間中学でプレッシャーを感じたことはなく、先生方の温かさをずっと感じていました」

仁宇先生によると、しらさぎ中学校には学習面で挫折を経験した生徒も多くいることから、先生方はポジティブな言葉をかけるように常に意識しているとのこと。

卒業生の峰さんは、毎年12月に行われる「学習文化発表会」を印象深く覚えていて、「英語で漫画などの日本文化のプレゼンをしたり、当時90歳で最高齢の生徒だった方からフラダンスを教えてもらってみんなで踊ったりもしました」と説明してくれました。

安藝校長先生によると、学習文化発表会は「生徒さんたちの笑顔がはじけ、保護者や他の参加者もその熱気に刺激を受けて、一緒に盛り上がるとても印象深いイベント」です。

夜間中学ならではの学びとは

夜間中学の最大の特徴は、年齢や背景、国籍が異なる様々な人が集うという点です。

「最初に担当したクラスには、80代の生徒さんも、当時10代の峰さんもいました。フィリピンから来て日本

の高校に行きたいという生徒さんもいました」と仁宇先生は振り返ります。

「僕より先輩の生徒さんも多いので最初はとまどいでしたが、教師と生徒という立場を超えてお互いをリスペクトしあえる環境があります。生徒さん全員から「授業の一言一句を聞き逃さない」「学びたい」という熱意を感じます。その熱意に私も応えなければと思います」

横山先生は「先生が教え、導くというよりも、それぞれの生徒さんのこれまでの歩みを認め、良いところを自分で発見できるお手伝いをするを心がけています」と言います。

峰さんは他の生徒たちとの交流を次のように振り返ります。「お一人お一人から人生で経験した出来事を聞かせてもらい、教科書では学べない知識も得られたように感じます。また、外国籍の方が約半数を占めていたため、それぞれの国の料理を一緒に作ったり食べたりして、ここでしかできない貴重な経験をさせていただきました」

峰さんは、防災に対する興味を深め、在学中に防災士の資格を取得し、卒業した今は気象予報士の資格取得を目標にしています。「しらさぎ中学校でいろいろな経験をすることで自分が一回り成長し、今の仕事に対する自信にもつながった」と言います。そして、同じように夜間中学に通うことに不安を感じている人には勇気を持って一歩踏



①～④ 学習文化発表会／⑤～⑥ 徳島中央高校の文化祭に参加(作品展示・阿波踊り披露)

徳島県の魅力

豊かな自然や歴史に彩られた名所が盛りだくさんの徳島県。その魅力の一端をご紹介します。



文化

阿波おどり

400年の歴史を持ち、日本三大盆踊りのうちの一つである阿波おどり。「ぞめき」と呼ばれるお囃子は踊る人も見る人も浮き足立たせてくれる軽快なリズムが特徴です。お盆は街中が踊り一色となり、4日間で100万以上の人が来場します。

歴史



霊山寺

約1200年前に弘法大師が修行した四国88箇所の霊場をめぐる「お遍路」。その長い旅は徳島にある第一札所、霊山寺から始まります。お遍路さんに労いの心を持つ「お接待」文化で、皆様を心からおもてなしします。

食



ご当地スイーツ

県内外多くの方が舌鼓を打つ徳島グルメの1つに鳴門金時を使用したスイーツがあります。ほくほくとした食感と優しくもしつかりとした甘みが特徴の鳴門金時、一瞬で虜になること間違いなしです！

自然



吉野川

四国三郎の名称で親しまれ、天下の暴れ川として名高い「吉野川」、その恵みは藍の生産を支えてきました。日本中の着物を蒼く美しく染めてきたその色は、ジャパンプルーと呼ばれるようになりました。季節や時間ごとに表情を変える川の姿は、時に誰もが心奪われるほどの美しさを魅せてくれます。

徳島県

徳島県は四国の右側に位置しており、標高1,000mを超える剣山をはじめとする山々や、最大直径30mにもなる世界最大級の渦潮など、スケールが大きく豊かな自然に恵まれています。歴史の中で育まれてきた伝統文化や、温暖な気候を生かした農産物に溢れた地域です。



2022年徳島県中央祭（ステージの部）にて審査員特別賞を受賞

み出し、楽しい学校生活を送ってほしいと願っています。

学びたい人がいつでも学べる「学び直しの拠点」として

安藝校長先生は今後の課題について、多様なニーズへの対応、県立ゆえの遠距離通学の問題、不登校経験者も含めて心と体の健康面での配慮、の3点を挙げます。

仁宇先生も夜間中学の役割について次のように語ります。「学ぶことにハードルを感じたり挫折したりした人たちの受け皿となり、居場所を提供する上で夜間中学の役割は非常に大きいと感じています。一方で認知度はまだまだ低いため、教育関係者、地域の方々にもっと周知できるような取組が求められると感じています」

徳島県教育委員会も現場の熱意に応えたいと思っています。二宮さんは次のように語ります。

「多様なニーズに応えるためには豊富な人材が必要です。県教育委員会としては、多様な教育活動に配慮した人員配置を行うなど、今後もサポートを続けたいと思っています。また、全国初の県立夜間中学ですので、密にコミュニケーションを保ちながら、対応が難しい事案に関しては相談に乗りたい

と考えています」

開校から4年目、試行錯誤で作りに上げてきた「誰一人取り残さない」学び直しの拠点は、地域社会においてさらに多様化するニーズの受け皿となっていくでしょう。

今後、増加する不登校を経験した生徒を対象にした学び直しの場、高校への進学支援も求められますし、外国籍の生徒の増加に伴い、日本語指導や日本社会への適応サポートの必要性が高まっています。

文部科学省は、夜間中学の更なる設置促進とともに、すでに設置されている夜間中学の教育課程の充実、地域社会の認知向上に向けた取組を引き続き支援していきます。

[夜間中学の設置促進・充実について](#)



ミラメクnote版のご紹介

ミラメクはスマートフォンでも読みやすいnoteでも記事を発信しています。

PDF版の記事に加え、note版では関連記事も随時更新中。

フォローして最新情報をチェックしてください。

ミラメクnote版でしか読めない記事の例

- ・【福島】ふるさとと子供たちのウェルビーイングを共に目指す | 教育振興基本計画×実践事例⑨
- ・【地域中核・特色ある研究大学支援】J-PEAKS事業採択大学の取組紹介

<https://mext-gov.note.jp>



目次

ミラメクINTERVIEW	2
災害時の「学び」を守る 大規模災害にいかに備え対応するか	
ミラメクポイント解説	6
科学の力で災害を力強くしなやかに乗り越える 防災科研	
ミラメク現場から	9
徳島県発！ 「学び直しの拠点」を目指す県立夜間中学	



文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

ミラメク

ミラメク -未来の羅針盤 文部科学省-
2025年冬号 1月6日刊行

(発行・著作)
文部科学省大臣官房総務課広報室
〒100-8959
東京都千代田区霞が関3-2-2 TEL:03-5253-4111 (代表)
<https://www.mext.go.jp/>

文部科学省の広報誌『ミラメク ~未来の羅針盤 文部科学省~』。
名称は、文部科学省のシンボルマークのモチーフである、「未来」を指し示す羅針
盤と、英語略称“MEXT”(メクスト)からとりました。

読者アンケート

本誌に関するご意見・ご感想、取り上げてほしいテーマ
(施策解説、話を聞きたい人物、魅力的な地域のプロジェクト)等をお寄せください。

<https://forms.office.com/r/9DWF89Vgrv>

